

# 日本ヘーゲル学会

## 第 29 回研究大会

2019 年 6 月 29 日（土）・30 日（日）

日本福祉大学 東海キャンパス

開催校責任者：赤石憲昭（日本福祉大学）

〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229 / TEL 0562-39-3811(代表)



日本ヘーゲル学会事務局

〒112-8551 東京都文京区春日 1-13-27 中央大学理工学部 語学人文社会教室 吉田研究室

TEL:03-3817-1956 E-Mail: hegel-jimukk@hegel.jp

郵便振替口座:00150-1-10718 日本ヘーゲル学会

## 【プログラム】

1日目：6月29日（土）

○11時00分～13時00分：理事会 [S307教室（南ウイング3階）]

○13時15分～16時50分：シンポジウム [S304教室（南ウイング3階）]

「ドイツ観念論と現代実在論——理性と意識の背後をめぐって」

司会：野尻 英一（大阪大学）

提題：加藤 紫苑（京都大学）・池松 辰男（東京大学）・下田 和宣（京都大学）

○17時00分～18時00分：総会 [S304教室（南ウイング3階）]

○18時00分～20時00分：懇親会 [キャンパスレストラン「ルポ」（南ウイング1階）]

（※会費：一般4,000円／学生2,000円）

2日目：6月30日（日）

○09時30分～12時00分：合評会 [S304教室（南ウイング3階）]

嶺岸 佑亮 『ヘーゲル 主体性の哲学 〈自己であること〉の本質への問い』（東北大学出版会・2018）

司会：山口 祐弘（東京理科大学）

評者：川瀬 和也（宮崎公立大学）・飯泉 佑介（東京大学）・山脇 雅夫（高野山大学）

○12時00分～13時00分：お昼休み

○13時00分～14時10分：特別講演（1） [S304教室（南ウイング3階）]

伊坂 青司（神奈川大学）

「ヘーゲル「世界史の哲学講義」研究の新段階——選集版と旧版を比較して——」

司会：石川 伊織（新潟県立大学）

○14時20分～15時30分：特別講演（2） [S304教室（南ウイング3階）]

福吉 勝男（名古屋市立大学）

「ヘーゲルと日本近代思想——今日的意義にもふれて」

司会：片山 善博（日本福祉大学）

## 【開催会場】

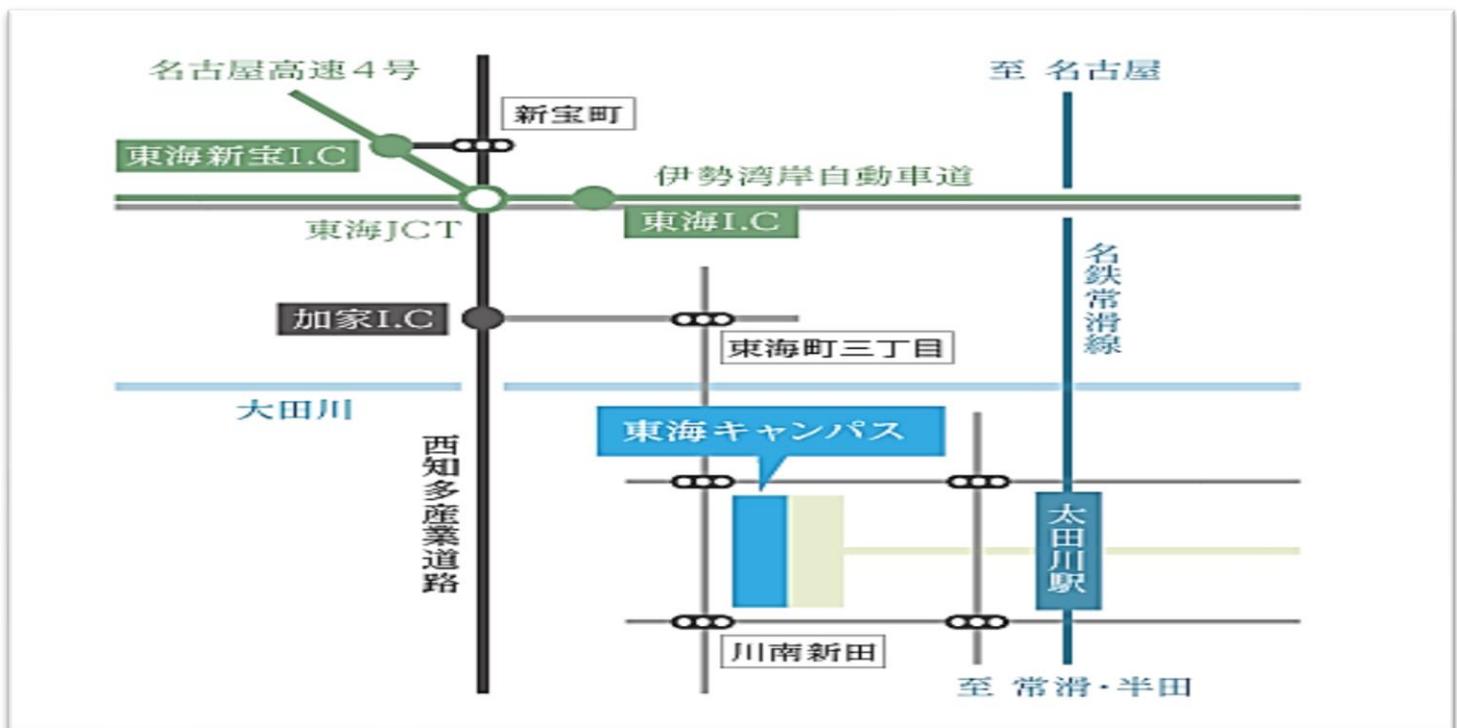
- (1) シンポジウム・合評会・特別講演： S304 教室（南ウイング 3 階）
- (2) 理事会（6/29 11:00-13:00）： S307 教室（南ウイング 3 階）
- (3) 会員控室（6/29 13:00-6/30 15:30）： S307 教室（南ウイング 3 階）

## 【懇親会場】

- キャンパスレストラン「ルポ」（南ウイング 1 階）
- 懇親会費：一般 4,000 円／学生 2,000 円

## 【会場アクセス】

名鉄名古屋駅—名鉄常滑線(17分)—太田川駅（南口）—徒歩(5分)—日本福祉大学東海キャンパス



- \* 「南口改札」を出て右手の「南口」を出てください。
- \* そのまま通路を直進し、階段かエレベーターで上にあがって歩道橋を渡ってください。キャンパスの建物が見えてきます。
- \* 歩道橋を渡って正面の門を入り、正面玄関からお入りください。
- \* 会場のある南ウイングは「正面玄関に向かって左」です。  
「左側」のエレベーターをご利用ください。

## 【シンポジウム要旨—提題 1】

現代実在論の展開（特徴と検証）——メイヤサーとガブリエルを中心として

加藤紫苑（京都大学）

シンポジウム全体の導入として、実在論の新しい動向についてその概要を報告する、というのが、私に課せられた課題である。しかし現代における実在論への転回は、広範囲に及ぶ思想動向であるため、限られた時間内にそのすべてに言及するのは難しい。それゆえ今回はカンタン・メイヤサーの「思弁的実在論」とマルクス・ガブリエルの「新しい実在論」の二つをとり上げ、主にドイツ観念論やヘーゲルの再評価という観点からではあるが、その特徴を紹介したい。

メイヤサーの『有限性の後で』が脚光を浴びたのは、先行世代に対する相関主義批判による面が大きい。メイヤサーによれば、この相関主義の起源はカントの批判哲学にあり、それ以後、現在に至るまでわれわれは相関主義的循環の中にとらわれているのだが、それにもかかわらず相関主義が根絶されない限り、（祖先以前性や信仰主義を始めとする）現代が直面する問題は真の解決へは至らないのである。ところで重要なのは、これにより、カントの有限性の立場を絶対的なものの哲学へ向けて克服する、というシェリングやヘーゲルの問題意識が再び現実的になる、ということである。ただしメイヤサーによれば、現在の相関主義はカントのものよりもいっそう強化されているため、絶対者の哲学は昔のままでは使いものにならず、強い相関主義にも対抗しうるように新しい思弁的哲学へと生まれ変わらねばならないのである。

現代のカント主義の克服のためにドイツ観念論を再び参照すべきである、という基本理念において、ガブリエルの「新しい実在論」はメイヤサーの「思弁的実在論」と重なりあう面をもつ。しかしガブリエルの場合、現代に蔓延するカント主義は、構築主義（社会構成主義）であり、それにともないドイツ観念論も、単に間主観的に構築されるにとどまらない真理の哲学という側面が重視されている。さらに、このドイツ観念論の再評価が現代哲学の水準に照らしても吟味に耐えうるように、ガブリエルは英米系の議論やその影響下にあるヘーゲル研究も頻繁に参照しているが、同時にその弱点を指摘することも忘れていない。その弱点は、彼らのヘーゲル理解がカント主義から完全に自由ではなく、同時にドイツ観念論全般、特に後期シェリングに関する十分な知識を欠いている点に見てとられる。本発表では上記の点に沿ってメイヤサーとガブリエルの実在論を紹介し、評価を試みる。

## 【シンポジウム要旨—提題 2】

「意識の構造とその背後——現代実在論の課題とヘーゲル主観的精神の哲学の射程」

池松辰男（東京大学）

本提題は、ヘーゲルの「主観的精神の哲学」およびその周辺領域における「理性／意識の背後の問題」——とりわけ「習慣」の問題——との関連において、本シンポジウム全体で提起されている議論の構制に対するヘーゲルの思考の位置付けと意義を探ることを試みるものである。

本提題はまず、カントとその問題意識を継承する哲学に対して今日なされている議論の配置を整理する。具体的には、一方では現代の思潮を浸食する自然主義／還元主義のかかえる問題に目を配りつつ、他方ではカンタン・メイヤサーの提起するいわゆる「相関主義」批判ならびにそこから導かれる「偶然性の必然性」を巡る一連の所説にも応えようとする試みとして、本提題では、マルクス・ガブリエル（『神話・狂気・哄笑』『なぜ世界は存在しないのか』等）とカトリーヌ・マラブー（『明日の前に』等）の試みを概観・検討する。両者はいずれも、「主体が存在することなしに生じる宇宙の秩序を記述しようとする」メイヤサーに対して、主体の持つ意義を擁護しながら、それぞれ主要には後期シェリングおよびカントの思考に寄り添いつつ再考を促すものである。とはいえ本提題がとりわけ着目するのは、同じその議論に、ヘーゲルの『エンチクロペディ』体系の思考との接点も見いだされるという点である。

本提題はつづけて、その接点を具体的には「習慣」のうちに見定めて、ヘーゲル自身の議論の検討に入る。もとより、主体の活動そのもののいわば背後に退きつつ、だがまさにそれによって（身体のありかたに即した）主体の活動の形成をも可能にするという、ヘーゲル習慣論そのものの含む示唆については、すでに多くの論者（上述のマラブー

のほか、デリダ、ジジェク、マクダウェルら）によって、これまでも直接的ないし間接的に高く評価されてきたところである。だが、本提題が焦点を当てたいのはむしろ、その習慣の構制そのものの歴史的な生成変化の構造についてのヘーゲルの示唆のほうである。すなわち、ヘーゲルは——具体的には近代の人倫のなかで形成される——習慣づけを経た精神が「すべてをおおよそあらかじめ見知っている」（「主観的精神の哲学 1827年講義」）いわば完結した主体となることを表明する一方で、まさにその同じ人倫の内部で習慣の構制が構造的に揺さぶられる可能性を繰り返し示唆してもいたのである。本提題はその示唆の要点を実際のテキストに即して示しつつ、上述のガブリエル／マラブーラの議論の前提と課題をも引き受けうるような、ヘーゲルの思考の射程の一端を確かめてみたいと思う。

### 【シンポジウム要旨—提題3】

#### 「ヘーゲル絶対的精神の哲学と現代実在論」

下田和宣（京都大学）

本提題では、主観的精神論以外の領域における「理性／意識の背後の問題」をピックアップし、そこから現代実在論の問題点を照射してみたい。宗教史や哲学史といった体系の内と外とを連結するような課題領域は、意識とその対象との弁証法的経験ではなく、むしろ意識の背後で遂行される「意識化」の活動を叙述するものとして、（メイヤサーが批判する）相関主義にあてはまるものであるかどうかは検討の余地がある。その点、ハルビツヒやガブリエルのように、ヘーゲルに実在論的要素を読み込むことで彼の絶対観念論としての形而上学を現代的に賦活しようとする読解は、ヘーゲルのテキストに着地しながら、これまでの「デフレ化」されて受容されてきたヘーゲル像を乗り越える可能性を秘めていると言えるかもしれない。

とはいえここで提題者が議論したいのは、そのようなかたちでヘーゲルを「救済」することが果たして今後のヘーゲル研究にとってのありうべき唯一の道であるのだろうか、ということである。ガブリエル、グラント、フェラーリスをはじめとした現代実在論者の多くがシェリングに親近性を示していることは周知のとおりである。仮に彼らの試みがヘーゲルをシェリングに寄せて解釈することであるとすれば、それは本当にヘーゲルを現代において活かすことになるのだろうか。媒介の過剰に疲れ、テキスト主義に飽きた彼らが「非哲学（ヤコービからラリュエルへ）」と同調しながら「偉大なる出口」（メイヤサー）を目指すとき、ヘーゲルであればそうした飛躍の手前で立ち止まってみせるに違いない。

そうした媒介否定の道ではなく、媒介のプロセスにおいて直接性を把握するというヘーゲル哲学のプログラムとの親近性を示しているのは実在論ではなく、ブルーメンベルクをはじめとする現代文化哲学の文脈である。その潮流は実在論ブームの陰でほとんど目立たなくなっている。そこで提題者は、「デフレ化」の解消を目指す実在論的解釈ですら触れることができず、その領域を唯一ヘーゲルとともに主題化することのできた文化哲学とともに、「理性／意識の背後」としての「宗教史」の問題を追跡する。それによって試みたいのは、現代思想の新たな可能性として文化哲学を対置することではなく、むしろヘーゲル研究が持っているはずの——そうした埋もれた読解可能性を掘り出すことで、現代における受容をさらに多様化させうるような——哲学的イニシアチブを明確化することなのである。

### 【合評会—自著紹介要旨】

『ヘーゲル 主体性の哲学 〈自己であること〉の本質への問い』（東北大学出版会、二〇一八年）

嶺岸佑亮（東北大学）

昨年10月に刊行された拙著は、ヘーゲル論理学と宗教哲学、ならびに関連する諸論考に徹底的に取り組むことで、ヘーゲル哲学を主体性の哲学として明らかにし、それにより有限な存在者の〈自己であること〉がどのようにとらえ返され得るのかを問おうとするものである。拙著は著者の博士課程在籍中の約四年半の間の研究成果をもとにしているが、その際主眼となっていたのは以下の二点である。すなわち、1) ヘーゲル哲学の根本モチーフである「概念 (der Begriff)」において必然性と自由の両者が同時に成り立つのはどのようにしてなのか。2) 「概念」において

は普遍性が一方的に優位に立つのではなく、個別性に対しても同等の位置付けが与えられており、しかも個別性が「概念がそこにおいてそれ自身をとらえる深み」(GW12, 49)であるとされるのはなぜなのか。これらの点を解明するために注目したのは、「概念」のうちに「定立されていること (das Gesetzsein)」としての側面がみられること、ならびに「概念」に「人格性 (die Persönlichkeit)」が帰属するということであった。このことを手掛かりに考察するならば、無限なものの中に〈有限であること〉が積極的な契機として含まれていることが明らかになる。これを踏まえるならば、有限な精神が神的なものたる無限な精神との関係を通じて自らの内なる無限を見出すという、宗教哲学におけるヘーゲルの基本思想が存在論的・形而上学的な論理学に裏打ちされていることが分かる。のみならず、ニュルンベルク期に書かれた『大論理学』やベルリン期の『宗教哲学講義』の核となる思想がフランクフルト期やイエーナ期以来一貫していることも明らかになる。『大論理学』の内在的研究はすでに膨大な蓄積があるが、ヘーゲルの思索の発展における位置付けやその哲学的意義については、70年代以降のヘーゲル・アールヒーフを中心とする一連の優れた研究があるものの、まだまだ十分とは言い難い状況である。そこで今回の拙著の合評会という機会を生かし、諸氏の議論を是非とも仰ぎたい所存である。

### 【特別講演 (1) 要旨】

ヘーゲル「世界史の哲学講義」研究の新段階——選集版と旧版を比較して——

伊坂青司 (神奈川大学)

アカデミー版『ヘーゲル全集』の講義録篇が刊行され始めたことによって、ヘーゲル研究は新たな段階に入ったといえよう。これまでヘーゲルの著作や草稿をテキストの中心にしてきた研究は、講義筆記録の復元によって彼の本音と哲学の実像を明らかにすることになる。

「世界史の哲学講義」の旧版テキストは、これまでヘーゲルの死後に本人のわずかばかりの草稿と複数の筆記録を元に編集され、しかも10年間(1822~1831年)に5回行われた講義の筆記録が最晩年の講義をベースに年度の区別なく合成されたものである。旧版テキストによって流布してきたいわゆるヘーゲル歴史哲学のイメージは、ヘーゲル本人の経年変化によるものなのか、あるいは編集によるものなのか。そもそも初回講義(1822/23年)の内容はどのようなものであったのか、単年度の講義筆記録の復元によって明らかになりつつある。本講演では、『ヘーゲル全集』講義録篇に先立って刊行された『ヘーゲル講義録選集』第12巻「世界史の哲学講義」(1996年、「選集版」と略記)をテキストにして、旧版の中でもこれまで広く使用されてきたグロックナー版との比較によって、選集版と旧版との違いを明らかにすることにしたい。

「序論」の中の際立った違いの一つは、選集版が「人間的自由の理念」について、人間が直接性を否定して自立的で自由になってゆくという原理的な議論をしているのに対して、グロックナー版は「理性が世界を支配する」という理性主義的な歴史観に基づいて、東洋からギリシア・ローマ世界を経てゲルマン世界へと至る世界史を、自由を知る人数の拡大という単線的な発展図式によって描いていることにある。このような理性主義的な歴史観は、「理性の狡知」というタームに象徴されるように、人間の情熱が理性に奉仕する手段とみなされる構図にもつながっている。また「国家」について、選集版では「精神的かつ現実的な現実性の全体」が、地理的自然とそれを土台にした諸民族の有限な活動、そして普遍的な宗教・芸術・学問として三重の構造において論じられるのに対して、グロックナー版では「人倫的全体」として論じられはするものの、国家の自然的な側面は外面的な要素とされている。それと関連して「地理的自然」について、選集版では諸民族の土台として位置づけられることによって民族精神の空間的並存が論じられるのに対して、グロックナー版では民族精神の地理的自然との連関はあくまでも外面的なものに止まっている。

以上のような序論における両版の違いが「本論」においてどのように現れるのか、とりわけ東洋世界の中でも中国とインドについて、時間の許すかぎり紹介することにしたい。

### 【参考文献】

ヘーゲル『世界史の哲学講義(1822/23)』上巻・伊坂青司訳、講談社学術文庫、2018年。

## 【特別講演 (2) 要旨】

### ヘーゲルと日本近代思想—今日的意義にもふれて

福吉勝男 (名古屋市立大学名誉教授)

はじめに—<受容>か<比較>か

(1) 例えば夏目漱石 (1867—1916) の G. W. F. ヘーゲル (1770—1831) 受容

- ・東京帝国大学英文科 2 年次、井上哲次郎教授の課題レポート「老子の哲学」(1892・明治 25 年 6 月 11 日付。老子の哲学とヘーゲル哲学を比較。井上教授はドイツ留学、ハイデルベルク大学で K. フィッシャーに師事)
- ・哲学科研究会誌『哲学雑誌』の編集委員 2 年余り (1891 年 7 月—1893 年 10 月)、ヘーゲル研究志望院生の米山保三郎と親友関係など
- ・野上豊一郎宛ての書簡 (1907・明治 40 年 3 月 23 日、4 月 1 日に朝日新聞入社)
- ・『三四郎』(1908 年 9—12 月) 中の記述 (2ヶ所、野上宛て書簡とほぼ同じ)
- ・『道草』(1915 年 6—9 月) における<健三—お住>関係と、『精神の現象学』での<Herr—Knecht>関係 (J.B. Bailie 英訳・1910 年、漱石購入「漱石山房蔵書目録」に有)

(2) 例えば福沢諭吉 (1835—1901) とヘーゲルの比較

#### I ヘーゲルと福沢諭吉

(1) 福沢、再検討のきっかけと検討結果

- ・『現代の公共哲学とヘーゲル』(未来社、2010 年) 刊行後、市民社会／公共／市場の相違を検討中、<civil>の「市民 (の、的)」初和訳者が福沢 (山本 定『市民社会論—歴史的遺産と新展開』有斐閣、2004 年)。
  - ①『福沢諭吉と<多面的>市民社会論—女性・家族「人間交際」』(世界思想社、2013 年 9 月)
  - ②「福沢諭吉と西洋近代思想—「自由論」討究」(『理想』2018 年 9 月)
  - ③「福沢諭吉とヘーゲル—<理想主義的現実主義>の思想」(『理想』2019 年 3 月)

(2) 類似性

1. 経歴上
2. 思想原則—理想主義的現実主義、理想の現実化志向強い
3. ヘーゲル「市民社会」(bürgerliche Gesellschaft, <Bedürfnis>と<Sittlichkeit>)。福沢「文明社会」(civilized society) <知徳の進歩>、<安楽と品位の進歩>、<独立自尊>、<人間交際の高尚化>(資料 1)

(3) 類似の根拠

- ・ヘーゲル、福沢ともに A. スミス (1726—1790) から学んでいる点。スミス、*The Theory of Moral Sentiments*(1759、第 6 版 1790)、*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nation* (1776)、における<商業社会>=<文明社会>、<sympathy>と「中流および下流の専門職では徳への道と財産への道はほとんど同一」

#### II スミスから学んだ福沢の軌跡

- (1) 『学問のすゝめ』で 1 回、『文明論之概略』で 4 回ほか計 16 回スミスに言及。経済学上の「定則発見者」として。経済学上での学びという点ではスミスよりも直接的には F. ウエイランド (1796—1865) から。実名をあげ詳しく引用。
- (2) ウエイランドの主要著作—*The Elements of Moral Science* (1835)、*The Elements of Political Economy* (1837)、(書名に注目、スミスの『道徳感情論』、『国富論』に近い。というようにスミスらの著作の概要をまとめ、教科書としてアメリカで刊行。これを福沢は和訳しつつ講義に使用)
- (3) スコットランド啓蒙と T. バックル (1821—1862)
  - ・ F. ハチソン (1694—1746) → D. ヒューム (1711—1764) (資料 2) → スミス (彼らの共通課題：<wealth>と<virtue>の一致の追求)
  - ・ バックル、*History of Civilization in England* (第 I 巻 1857、第 II 巻 1861。書名に反しスコットランドとフランスについて多くの記述、スミスを高く評価)

#### III スミスから学んだヘーゲルの軌跡と、その後

- (1) 『法・権利の哲学』(1820) と「イギリス選挙法改正」(1831)
- (2) ヘーゲル死後の展開と K. マルクスのパリ手稿 (1843—44。スミスらの経済学研究、ヘーゲル『精神の現象学』、『法・権利の哲学』研究、フランス社会主義思想研究)

終りに—今日的意義に関わって

- (1) 立憲君主制／立憲天皇制、共和制と民主主義
- (2) 市民社会／市場 (社会) と民主主義  
その他—例えば訳語問題

\*事務局注：福吉先生より、「当日、改めてレジュメ (若干の修正有かもしれませんが) と資料①、②をお配りする予定」とのことです。